明暗
下

夏目漱石

明暗

下

夏目漱石

ほるぷ出版

市古貞次・小田切進＝編　日本の文学　30

明　暗（下）

著　者　夏目漱石

責任編集　市古貞次（古典編）
　　小田切進（近代編）

発行日　昭和六十年八月一日　初版第一刷発行

発行所　株式会社　ほるぷ出版
　　代表　中森蒔人
　　東京都新宿区新宿二―十九―十三
　　電話（〇三）三五四―七〇三一（代）

総発売元　株式会社　ほるぷ
　　東京都新宿区新宿二―十九―十三
　　電話（〇三）三五六―六二一一（代）

製　作　東京連合印刷株式会社
　　印刷　大日本法令印刷株式会社
　　函・表紙印刷　共同印刷株式会社

目次

明暗（下）　1
注　490
二十世紀小説としての「新しさ」　後藤明生　493

明

暗

（下）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

百三

彼女が医者の玄関へ掛ったのは其三四分前であった。医者の診察時間は午前と午後に分れていて、午後の方は、役所や会社へ勤める人の便宜を計るため、四時から八時迄の規定になっているので、お延は比較的閑静な扉を開けて内へ入る事が出来たのである。

実際彼女は三四日前に来た時のように、編上だの畳附だのという雑然たる穿物を、一足も沓脱の上に見出さなかった。患者の影は無論の事であった。時間外という考えを少しも頭の中に入れていなかった彼女には、それが如何にも不

思議であった位四囲は寂寞していた。

彼女はその森とした玄関の沓脱の上に、行儀よく揃えられたただ一足の女下駄を認めた。価段から云っても看護婦抔の穿きそうもない新しい其下駄が突然彼女の心を躍らせた。下駄は正しく若い婦人のものであった。小林から受けた疑念で胸が一杯になっていた彼女は、しばらくそれから眼を放す事が出来なかった。彼女は猛烈にそれを見た。

右手にある小さい四角な窓から書生が顔を出した。そうして其処に動かないお延の姿を認めた時、誰何でもする人のような表情を彼女の上に注いだ。彼女はすぐ津田への来客があるかないかを確めた。それが若い女であるかないかも訊いた。それからわざと取次を断って、ひとりで階子段の下迄来た。そうして上を見上げた。

上では絶えざる話声が聞えた。然し普通雑談の時に、言葉が対話者の間を、

淀みなく往ったり来たり流れているのとは大分趣を異にしていた。其所には強い感情があった。亢奮があった。しかもそれを抑え附けようとする努力の痕がありありと聞えた。他聞を憚るとしか受取れない其談話が、お延の神経を針のように鋭くした。下駄を見詰めた時より以上の猛烈さが其所に現われた。彼女は一倍猛烈に耳を傾けた。

津田の部屋は診察室の真上にあった。家の構造から云うと、階子段を上ってすぐ取附が壁で、其右手が又四畳半の小さい部屋になっているので、此部屋の前を廊下伝いに通り越さなければ、津田の寐ている所へは出られなかった。従ってお延の聴こうとする談話は、聴くに都合の好くない見当、即ち彼女の後の方から洩れて来るのであった。

彼女はそっと階子段を上った。柔婉な体格を有った彼女の足音は猫のように静かであった。そうして猫と同じような成効をもって酬いられた。

上り口の一方には、落ちない用心に、一間程の手欄が拵えてあった。お延はそれに倚って、津田の様子を窺った。すると忽ち鋭いお秀の声が彼女の耳に入った。ことに嫂さんがという特殊な言葉が際立って鼓膜に響いた。見事に予期の外れた彼女は、又はっと思わせられた。硬い緊張が弛む暇なく再び彼女を襲って来た。彼女は津田に向ってお秀の口から抛げ附けられる嫂さんという其言葉が、何んな意味に用いられているかを知らなければならなかった。彼女は耳を澄した。

二人の語勢は聴いているうちに急になって来た。二人は明らかに喧嘩をしていた。其喧嘩の渦中には、知らない間に、自分が引き込まれていた。或は自分が此喧嘩の主な原因かも分らなかった。

然し前後の関係を知らない彼女は、ただそれ丈で自分の位置を極める訳に行かなかった。それに二人の使う、というよりも寧ろお秀の使う言葉は霰のよう

に忙しかった。後から後から落ちてくる単語の意味を、一粒ずつ拾って吟味している閑などは到底なかった。「人格」、「大事にする」、「当り前」、斯んな言葉が夫から夫へと其所に佇立んでいる彼女の耳朶を叩きに来る丈であった。

彼女は事件が分明になる迄凝と動かずに立っていようかと考えた。すると其時お秀の口から最後の砲撃のように出た「兄さんは嫂さんより外にもまだ大事にしている人があるのだ」という句が、突然彼女の心を震わせた。際立って明瞭に聞えた此一句ほどお延に取って大切なものはなかった。同時に此一句程彼女にとって不明瞭なものもなかった。後を聞かなければ、それ丈で独立した役にはとても立てられなかった。お延は何んな犠牲を払っても、其後を聴かなければ気が済まなかった。然し其後は又何うしても聴いていられなかった。先刻から一言葉毎に一調子ずつ高まって来た二人の遣取は、此所で絶頂に達したものと見做すより外に途はなかった。もう一歩も先へ前めない極端迄来ていた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

もし強いて先へ出ようとすれば、何方かで手を出さなければならなかった。従ってお延は不体裁を防ぐ緩和剤として、何うしても病室へ入らなければならなかった。

彼女は兄妹の中を好く知っていた。彼等の不和の原因が自分にある事も彼女には平生から解っていた。其所へ顔を出すには、出す丈の手際が要った。然し彼女には其自信がないでもなかった。彼女は際どい刹那に覚悟を極めた。そうしてわざと静かに病室の襖を開けた。

百四

二人は果してぴたりと黙った。然し暴風雨が是から荒れようとする途中で、急に其進行を止められた時の沈黙は、決して平和の象徴ではなかった。不自然に抑えつけられた無言の瞬間には寧ろ物凄い或物が潜んでいた。

二人の位置関係から云って、最初にお延を見たものは津田であった。南向の縁側の方を枕にして寐ている彼の眼に、反対の側から入って来たお延の姿が一番早く映るのは順序であった。其刹那に彼は二つのものをお延に握られた。一つは彼の不安であった。一つは彼の安堵であった。困ったという心持と、助かったという心持が、包み蔵す余裕のないうちに、一度に彼の顔に出た。そうしてそれが突然入って来たお延の予期とぴたりと一致した。彼女は此時夫の面上に現れた表情の一部分から、或物を疑っても差支ないという証左を、永く心の中に掴んだ。然しそれは秘密であった。咄嗟の場合、彼女はただ夫の他の半面に応ずるのを、此所へ来た刻下の目的としなければならなかった。彼女は蒼白い頬に無理な微笑を湛えて津田を見た。そうしてそれが丁度お秀の振り返るのと同時に起った所作だったので、お秀にはお延が自分を出し抜いて、津田と黙契を取り換わせているように取れた。薄赤い血潮が覚えずお秀の頬に上った。

「おや」
「今日は」
軽い挨拶が二人の間に起った。然しそれが済むと話は何時ものように続かなかった。二人とも手持無沙汰に圧迫され始めなければならなかった。滅多な事の云えないお延は、脇に抱えて来た風呂敷包を開けて、岡本の貸して呉れた英語の滑稽本を出して津田に渡した。其指の先にはお秀が始終腹の中で問題にしている例の指輪が光っていた。
津田は薄い小型な書物を一つ一つ取り上げて、さらさら頁を翻して見たぎりで、再びそれを枕元へ置いた。彼はその一行さえ読む気にならなかった。批評を加える勇気などは何処からも出て来なかった。彼は黙っていた。お延は其間に又お秀と二言三言ほど口を利いた。それもみんな彼女の方から話し掛けて、必要な返事丈を、云わば相手の咽喉から圧し出したようなものであった。

お延は又懐中から一通の手紙を出した。

「今来掛に郵便函の中を見たら入って居りましたから、持って参りました」

お延の言葉は几帳面に改たまっていた。津田と差向いの時に比べると、丸で別人のように礼儀正しかった。彼女は其形式的な余所余所しい所を暗に嫌っていた。けれども他人の前ことにお秀の前では、そうした不自然な言葉遣いを、一種の意味から余儀なくされるようにも思った。

手紙は夫婦の間に待ち受けられた京都の父からのものであった。是も前便と同じように書留になっていないので、眼前の用を弁ずる中味に乏しいのは、お秀からまだ何にも聞かせられないお延にも、略見当丈は附いていた。

津田は封筒を切る前に彼女に云った。

「お延駄目だとさ」

「そう、何が」

「お父さんはいくら頼んでももうお金を呉れないんだそうだ」

津田の云い方は珍しく真摯の気に充ちていた。お秀に対する反抗心から、彼は何時の間にかお延に対して平たい旦那様になっていた。しかも其所に自分は丸で気が附かずにいた。衒い気のない其態度がお延には嬉しかった。彼女は慰めるような温味のある調子で答えた。言葉遣さえ吾知らず、平生の自分に戻ってしまった。

「可いわ、そんなら。此方で何うでもするから」

津田は黙って封を切った。中から出た父の手紙は左程長いものではなかった。其上一目見ればすぐ要領を得られる位な大きな字で書いてあった。それでも女二人は滑稽本の場合のように口を利き合わなかった。ひとしく注意の視線を巻紙の上に向けている丈であった。だから津田がそれを読み了って、元通りに封筒の中へ入れたのを、其儘枕元へ投げ出した時には、二人にも大体の意味はも

う呑み込めていた。それでもお秀はわざと訊いた。

「何と書いてありますか、兄さん」

気のない顔をしていた津田は軽く「ふん」と答えた。お秀は一寸余所を向いた。それから又訊いた。

「あたしの云った通りでしょう」

手紙には果して彼女の推察する通りの事が書いてあった。然しそれ見た事かといった様な妹の態度が、津田には如何にも気に喰わなかった。それでなくっても先刻からの行掛り上、彼は天然自然の返事をお秀に与えるのが業腹であった。

百五

お延には夫の気持がありありと読めた。彼女は心の中で再度の衝突を惧れた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo